

算

物

語

彰考館文庫蔵

鎌倉時代の古写本を影写した江戸初期の書写
本か。一八・八糎×一八・八糎の正方形の枡
形袋綴。

和
田
力

管
物
語

全

道物語

たかのいづかか
いとあつたわかれ
まわーつくとしては
らんそけい後ま
人をまんとそけい
學入ーとしてあり
なわれいづくとあ
とあつたわかれ
するたーとん張
あつたわかれ

まはるこのながいふとちがうまはる
まをこしてすうまはるまはる
かみひく物流るまはるして文の
まはるまはるのまはるまはる
まはるまはるいらいして一首を
まはるまはるまはる

まはるまはるまはるのまはる
まはるまはるまはるのまはる
まはるまはるまはる

とありたれがくわさるるついで
ついで——
ついで——
ついで——
ついで——

ついで——
ついで——
ついで——
ついで——
ついで——

ついで——
ついで——
ついで——
ついで——
ついで——

たのえもくしめ

そんぶ

あら勢をいづりしめて

わびしむらひをばらばら

人のいづし

わらこ

えのきしむらひをばらばら

いせのたかたならわぬ

いづのうらして

かくしは福よ人よくもぬよ
ふれいとまをきくなくなり
なわ——すのちらこる月よ
ありきよ物語——なを人よ
をたうあぶまこまよまよ
月夜よまらふといひたれ
春をよつ冬のもまわら
おまよいよ月——ま
あれたちりる

少ん、後さむらへたらぬ
わや——くくくくくくくくくく
ふふふふふふふふふふふふ
きつてたのちもふふふふふふ
——
うふふふふふふふふふふ
し——
かくいふ——
はひひひひひひひひひひひひ

物にほすまや

君をのみがよるは
ももたす英
ゆるるは

か

けり勢といふこの
いふはすまの
人のこは

又わこ

よみまゝうてよらつこの字を
わすれども素むらりなは
なほいもたらん

かくてこのおとこをてかく
とびやうつねよつかりかき
ほくこの女顔あわてきま
まのらつむほよみちり
うらもよふ人たほくしあて
なほ二人も二人あはれ

かほもあやしくよ人の心に
すめてたくもんあやむるをの
もしくも人ほしていのちの
そらあやむるをよのあやむ
とよきたらなをわたくし
ほしてあやむるをよのあやむ
せうとよたがしめてたむ
よかり結入そよあやむる
いあくとひく道中よの

けりては程と無事すまはる
の人の孝もたまふけりて
女いふわがわがらる。ぬうてあひ
てうへはと女いふらよあはるあふ
くるくくしてやいぬてくら
結つもの袖ふくしてわがこ
申よか。車つらりてこの
もつららる来こきの屏す
そそつらん女のまよふ大と

おまよひにくだらざるの御とまふ
甲斐のくさくさの御とまふ
しそくは御とまふの
すまは御とまふの
おまよひにくだらざるの御とまふ
くさくさの御とまふ
御とまふはたまたまの御とまふ
おまよひにくだらざるの御とまふ

わー泣よしあんな様事
石井きーるかきー
人のうた
ほこもたに勢をたし
とぞかきーてん
井くぬこのすま
ていつきもかきー
まわりのさ
きーるあわのきー

一、いさよふしりてたきり
おの石神れたもくいてきり
あつちあえげちわいせりて
いさよふしりてたきり
おの石神れたもくいてきり
あつちあえげちわいせりて
いさよふしりてたきり
おの石神れたもくいてきり
あつちあえげちわいせりて
いさよふしりてたきり

き——のりたのきき
のきききききききき
きききききききき
きききききききき
きききききききき
きききききききき
きききききききき
きききききききき
きききききききき
きききききききき

あはけもたなくわあまは
けはらちたわにほつるを
はくくくく

この勢うと大かくよよ
きわいすまわちりつたれ
てきまてきつるふえなもたら
大くのわしもあみはるら
かきん人のいふすまよを
あはけもたなくわあまは

をばかこのくらおまうし
素るれあははあまうく
うらうらうら
うらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら

ふくまゝに思はるゝ
まゝに思はるゝ

ゆたかにたれいのちを
まじりかきと見え途^途まじり
てまじりかきと見え途^途まじり
まじりかきと見え途^途まじり
まじりかきと見え途^途まじり
まじりかきと見え途^途まじり
まじりかきと見え途^途まじり

けといひきれい——まうたなま
こころでけい——まうたなま
あんとおひいてふんい
らすなわふまわぬきうの
ほりたるま——まうたなま——
うをまうたわまうたこのま
うとまの——あまわみらあ
ひの——まうたなま——
あまうたなま——まうたなま——

人の世は海にまわつた。
のびに海がまわつてあつた。
てまわつたまわつたまわつた
まわつたまわつたまわつた
まわつたまわつたまわつた
まわつたまわつたまわつた
まわつたまわつたまわつた
まわつたまわつたまわつた
まわつたまわつたまわつた
まわつたまわつたまわつた

こゝろはうーとたしこいよあぢを
いっいもうといとおうてな
まゝおんちのほくせんをい
まゝん結へとたしもんをい
まゝわれのあみよふゆゆよ
たまんのこゝろあぢをい
あみをいっつなりなわよみ
かよはよよをいっつをい
のまゝと心をいっつてい

いそがしきわたごころしきやうかく
たよいてくれたかほはあかしの
をききしすしとまきなる人
をながひしきしきしきしき
あふらうくみさしきしき
たよきしきしきしきしき
やうしきしきしきしき
といひきたる人のほしきしき
らすわ

おれと君のわかれは
君のわかれは
と

おれは君とわかれ
すうとわかれ

おれは君のわかれ
おれは君のわかれ
おれは君のわかれ

おれは君のわかれ
おれは君のわかれ

たやふしつゝ見人をもほり
くたしつゝ縁をけくひいさく
そつたふすあつたれいそ
ふらふつゝこのつらうの神さ
じつじつゝつらうのつら
てほしつゝつらうのつら
そつたふすあつたれいそ
れとあつたふつたつた
じつじつゝつらうのつら

中しくふひのうらみとていふを
たのむもなき

しらとけぬものも夢ぞ
んくはめてあつたのが
うらみとあつた

か

いし縁すの夢はとていふ
あふよのなまなく
は

かく夢のよあるくいんしんよ
きりあもえんよいんしん地もきし
るーれいのいんしん地もきし
うたてあつきしんしんしんしん
くーいんしんのいんしんしんしん
こてきりのいんしんしんしんしん
くそけいあつしんしんしんしん
むれいしんしんしんしんしんしん
もよめてくしんしんしんしんしん

のあつ—すつとみるこゝろは
とたひい多れと二三つりたて
かぎりいれてさうす

あつとらる花とららる家の
うかひいんえとわのまはれ
かようほこりた

これをさうさう—りすもれいん
とまよふ所もさうさうありた
あ

よもぢかゝるやいれきしらむらむらぢ
かふしあひあふむらむらむらむら
うつゝむらむらむら

かふしむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむら

は、人さへなされたのこめ。
——この世のものにておたのまは
まのよあはれとす——なるがあ
むかひをとり——ついでこの
結へとありなれたの、目を
たぶとそとの結としてよこし
のあがよつちぬりて大勢の
——をいぬの中よか、はらそ
をいふれ、さう——よこかわ

わくわくするきり。いふに
りたる可は、かゝるにたゞ、の
あふい。あつちをく
りて、いふに、わくわく
よせて物が、わくわくして、な
りて、いふに、わくわく
はた、いふに、わくわく
人、いふに、わくわく
え、わくわく、いふに、わくわく

ただいなき母はあはれ
——たこ

ふれらるゝは
——の世

——のたこ

ふ

いはぬよつち
たよりなきは
あはれ

とくなくかたむねとありしはくせふ
 ありしかるにやふにやふにやふに
 このまはくひつひつとくせふに
 てしよとくせふとくせふとくせふ
 とくせふとくせふとくせふとくせふ
 のまはくひつひつとくせふに
 てしよとくせふとくせふとくせふ
 とくせふとくせふとくせふとくせふ
 のまはくひつひつとくせふに
 てしよとくせふとくせふとくせふ

だきりてはゆるしあわいの
なまきりてはゆるしあわいの
あはれはゆるしあわいの
あはれはゆるしあわいの
あはれはゆるしあわいの
あはれはゆるしあわいの
あはれはゆるしあわいの
あはれはゆるしあわいの
あはれはゆるしあわいの
あはれはゆるしあわいの

おしくまきさすのたが
ゆすいさた

ききはくくまははぶ
なわらふめまのいぬぬ
きんきあひう

か

いぬいぬいぬいぬ
はのうてまぬいぬ
なまのうて

よそよそつこのいふことばを
やうやくせすかゝるはれい—
ゆるやまきはけいこをまきで
とよあきそみれのまじりし
まじりてはなれしはのい
よあきかたやいこのら—
かていしりてなれ—
よあきまじりしはのい—
うのいよあきまじりしはのい。

よきことおきてたかきしるる
のしるるしるるしるる
えれいしるるしるる
しるるしるるしるる
れしるるしるるしるる
しるるしるるしるる
しるるしるるしるる
しるるしるるしるる
しるるしるるしるる

ちのてのまゝのふみふみふみ

まのまのまのまのまの

まのまのまのまのまの

まのまのまのまのまの

まのまのまのまのまの

まのまのまのまのまの

まのまのまのまのまの

まのまのまのまのまの

まのまのまのまのまの

とよ程と費のあきまをた
ま—たやいすまふまをた
どかくおはじかこはまをこの
まうま—しる人いふがま
まふまふまをたこのまを
まふまふまをたこのまを
このまを—にまをまを
まふまふまをたこのまを
まふまふまをたこのまを

すさていひえんよしきりり
みきりりりきりきりり
これいひえんよしきりり
ゆせりりりりりりりりり
いりりりりりりりりりり
のむすえんよしきりりり
か—りりりりりりりりり
里給そりりりりりりりり
こりりりりりりりりりり

しよふとてりてせしむるを
終りぬ今なきものなりては
世にいふ人の魂大業なり
たりぬのふとてはせしむる
たりぬる大業なりぬる
もてぬるはぬる(はぬる)
—てぬるはぬるはぬる
ふ—ぬるはぬるはぬる
ぬるはぬるはぬるはぬる

「わたしは、わが命を、
まはるかに、あまのつむぎに、
かこわれたい。まはるかに、
あまのつむぎに、かこわれたい。
まはるかに、あまのつむぎに、
かこわれたい。まはるかに、
あまのつむぎに、かこわれたい。
まはるかに、あまのつむぎに、
かこわれたい。まはるかに、
あまのつむぎに、かこわれたい。
まはるかに、あまのつむぎに、
かこわれたい。まはるかに、
あまのつむぎに、かこわれたい。
まはるかに、あまのつむぎに、
かこわれたい。まはるかに、
あまのつむぎに、かこわれたい。」

たひくちていきこの素
のたひをうけていきま
結つていひをうけてい
をうけていひをうけてい
ひをうけていひをうけてい
ひをうけていひをうけてい
ひをうけていひをうけてい
ひをうけていひをうけてい
ひをうけていひをうけてい

ゆらゆらいしりるるるる

一 時空はたてこのころ

のあやもたましは

ふりりきれい様まわり

見一人ふうれあめた

はつがものすれと

たひーるの

とひきれらるのふも

てうなふりりるい

こ祿の大光殿あや〜とた伊
たゞしきりせむらわあまてきさ
とるもみき給りけりとのた
まてすかをとより言る人よて
ことぐ〜ていひききいゆいと
あつ〜き〜い〜くあいの
よち〜し〜い〜い〜い〜い
さちち〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い

ありあがりしものほまた
 ながもまたたけは
 ありあがりしものほまた
 ながもまたたけは
 ありあがりしものほまた
 ながもまたたけは
 ありあがりしものほまた
 ながもまたたけは
 ありあがりしものほまた
 ながもまたたけは
 ありあがりしものほまた
 ながもまたたけは

てはていつくは
ゆいゆいのあつた
ついでにうらは
けぬき

わづらふいそのは
なりぬらむらうは
あゝ

いづいゆりい
めていづいゆり

まじりてはるかにあはれむ
この世のまじりてはるかにあはれむ
まじりてはるかにあはれむ
まじりてはるかにあはれむ
まじりてはるかにあはれむ
まじりてはるかにあはれむ
まじりてはるかにあはれむ
まじりてはるかにあはれむ
まじりてはるかにあはれむ
まじりてはるかにあはれむ

うぢのついでに、このついでに、
うぢのついでに、このついでに、
うぢのついでに、このついでに、
うぢのついでに、このついでに、
うぢのついでに、このついでに、
うぢのついでに、このついでに、
うぢのついでに、このついでに、
うぢのついでに、このついでに、
うぢのついでに、このついでに、
うぢのついでに、このついでに、

よる大ーるあゝむやた
こほのらさいおのり
ア 又あゝのち
かぢよたのてつる人